289-Ta562-6ウ
1200500732489

杉山忠亮著作
眞木保臣贊評
高山彦九郎正之傳

高山彦九郎先生尉べ墨會編

始

289
TA562
O

917
X
442

杉山忠亮著作
眞木保臣贊評

高山彦九郎正之傳

はしがき

夙に皇室の式微を嘆き天下を歴遊して、孝義を奬め且密に憂國の士と結びて、尊王斥覇の機運を醞釀し、志業未だ成らざるに、遂に屠腹して赤心を露した上毛の熱血家、高山彦九郎正之子逝いて正に百五十年、今茲其祭祀を修むるに方り、會〻我郷の偉人にて勤皇討幕の先驅を爲して事志と違ひ、洛外天王山上に忠魂を埋めた眞木和泉守保臣翁の生誕後百三十年に遇ひ、感慨特に深きものがある。

翁が成業後、楠公の精忠を景仰して、政權恢復の志を抱き、擧族匪躬の節を盡した事は、世人の周知する所であるが、翁は又常に高山子の精神氣魄に傾倒して、嘗て

高山の大人何人ぞ人ならば
よぢても見てん我何人ぞ

とて欽慕發憤の感懷を述べてゐる。

爾來幾多の忠臣烈士が奮起して、大政を翼贊し奉らんとする至誠凝りて、明治維所の大業成り、天皇親政の古に復つたのである。

回顧すれば、天保十三年、高山子の五十年忌に丁るや、我地方の志士相謀りて追弔の奠を擧げてゐる

が、當時米藩天保學(水戸學)の三尊と稱せられた、眞木保臣・木村重任・村上守太郎三士の捧げた祭文稿は、今に現在してゐる。——百年祭は明治二十五年市外山川村茶臼山上の御楯靈神社にて行はれて居る。

是歳、又泉州翁が、水戸の儒者杉山忠亮著す所の高山正之傳を筆寫熟讀して、欄外に己の所感を錄せる物が、近時發見されたが、原本は全部白文なりし故、讀解し易からしめんが爲、今回本會實行委員黑岩玄堂氏に囑して、同書に句讀及び返り點を附し、又間々訓詁を施し、之を印刷して汎く江湖に頒ち、以て先賢の遺烈を顯揚し、後進をして崇尙私淑して、大に志氣を鼓舞振作せしめたいと思ふ。

今や大東亞戰爭は、　陛下の御稜威の下、忠勇なる將兵が身を捨て家を忘れて、君國の爲勇戰奮鬪の結果、前古未曾有の大戰果を收めて、皇威六合に輝き、八紘一宇の大使命を遂行せんとする秋、幸に本書を手にする人は、反覆精讀して、皇道精神修養の一助たらしめられんことを切望する。

皇紀二千六百二年（昭和十七年支那事變第五周年記念日）七月七日

對米英宣戰大詔奉戴後七ヶ月

高山彦九郎先生慰靈會

會長　井上秀太郎識

高山正之傳

（杉山忠亮）

編者曰ク。杉山千太郎ハ水戸藩ノ儒者ニシテ。諱ハ忠亮（タダアキ）。字ハ子元。復堂又致遠齋ト號ズ。初メ古賀精里ニ學ビ。後藤田幽谷ニ師事ス。文政四年彰考館ニ入リ。修史ノ事ニ從フ。天保二年總裁代役ニ進ミ。十一年弘道館助教ト爲リ。又公子ノ傅タリ。十四年彰考館總裁ヲ兼ヌ。弘化二年歿ス。歳四十五。

保臣曰。正之君祖先勤王。正之公ノ勤王亦一層親密ナリ。

高山正之。字仲繩（アザナハチユウジヨウ）。稱彦九郎。上野新田郡細谷（ホソヤ）村人也。其先遠江守某。建武之亂屬左中將源義貞勤王。所謂十六騎黨之一也。及新田氏爲足利氏所滅。遠江守之裔（エイ）。遂微在民

其事實讀本書了然矣。

保臣曰。正之公之風致可愛。又勇氣凜々。氣象可想。

保臣曰。正之公ノ榮風誰如之。

保臣曰。田沼氏ハ正之公ノ罪人ナリ。

間。然以其世爲鄉里舊姓。故雖降爲編戶。猶常佩雙刀。官莫之禁也。父曰正教稱良右衞門。膂力絕人。每出必令僕負弓矢。數游獵山野。時或格殺猛獸。人稱其勇。正之幼孤。爲祖母所鞠。年十三讀太平記。見中興之忠臣志業不遂。慨然發憤。有功名志。年十八游京師。讀書二歲。然後乃出見都下諸生交道日廣。聲名籍甚。高門巨室。多爲布衣之交。天朝名卿中山大納言愛親卿亦奇其爲人。善遇之也。於是正之仗劍周游四方所至必與賢豪長者交。當此之時田沼氏爲政於江戶。風俗大敗。侈靡日甚。識者竊憂焉。正之乃歸上野。正之長八

917
442

尺餘。鬚髯如神。高邁有奇節。議論英發。忠誠動人。其覽書史。初不經意過目則剖是非。析義理若精思者。嘗見室直清所論著。至於其論楠公。以應召直造笠置。爲度量不足。引諸葛亮三顧乃出廬之事。以議之憤然罵曰。腐儒何論事之迂也。夫元弘之時。豈可與三國同年而論哉。劉漢之末。天下分裂。豪傑竝起。當此之時。劉玄德者。故販履織席之人。自稱曰帝室之胄。豈能辨其眞妄哉。亦猶今世奴僕輩。號稱源平。以自誇者也。孔明之三顧而出。於我心猶以爲速。雖累百顧二百顧。猶未爲緩焉。如楠公則異於是。赫々

保臣曰。有文事者。必有武備。言之乎。

天朝。神器之所在。六合之所仰。開闢以來。　神聖相承。
皇統一姓。傳之無窮。普天率土。孰非皇民。而楠公則
廷臣之裔。而畿內之民也。雖無召命。豈可視國家之難。恬
然自安哉。聞　天皇蒙塵。奮然投袂而起。安得效彼諸葛
輩之爲也。讀書如是。雖百萬卷何益乎。取其書投之堂下。
天明季年。京師災。正之聞之。馳而赴京晝夜兼行。夜過木
曾山中。有賊數人。拔刀欲脅正之。正之瞋目叱曰。汝不
知上野高山彥九郎乎。今聞　天闕有災。馳而赴之。汝輩
豈足汚我刃乎。賊皆慴伏。後巨賊繫大阪獄。自語平昔未嘗

保臣曰。行三年之喪。孝子ノ事竟矣。

有所恐怖。嘗在木曾山中。要人爲劫。遇一丈夫。瞋目叱我。
憶之今猶股栗也。彼自呼高山某。豈所謂天狗者乎。此時田
沼氏既罷。白川侯代之執政。多所改正。先是正之嘗遇祖母
之憂。以有鞠養恩。欲服再期喪。其兄止之正之不聽。與叔
父正業稱長藏。廬于冢側三年。鄉邦稱之。事聞江戶。有司欲旌
之。會有欲中正之者。誣告不友於兄。有司亦以其人異常。
召而詰之曰。庶民帶刀劍。國有定制。汝居畎畝之中。而雙
劍不離身。抑何義也。正之對曰。某自高山遠江守以來。二
十餘世。未嘗有一人之不帶刀劍者也。有司奇其言。且憐其

保臣曰。正之公非儒者雖然又無學力。唯實學而已。至誠感人。

保臣曰。堂々發大聲講大學。音聲如雷。嘗聞于師。

磊落無他。因謂之曰。汝欲仕官乎。所業者何。技擊乎。將儒學乎。正之曰。士雖貧賤。以身許人。豈容易哉。君子之仕也。行其義也。道之不行。豈有一毫攫取爵祿之心哉。且學所以明人倫也。士之志道者豈盡儒者哉。某平生好讀書。然初未嘗欲以文士自名。故不效書生治章句也。自幼喜擊劍。而技藝立身。固非所欲。以故亦不肯竟也。有司微笑曰。以汝之所言。汝亦求仕者。唯不求之於不可求之日耳。汝雖非文學者流。亦以道自任。可謂儒矣。試講大學。有司曰。果不負其所名。竟釋之。從是正之遂辭家。日事遊歷。將以沒

保臣曰。藤田一正ハ幽谷先生也。東湖藤田虎之助ノ父。名於世。水府ノ碩學。

齒也。寛政己酉之秋。正之游江戸。訪長久保玄珠。玄珠水戸人。嘗遺立原萬書曰。某在京師。與高山處士交。此人倜儻奇偉。不齎一錢。而跋涉天下。常自慕魯仲連之爲人。適藤田一正年十三。作詩贈之。亦目以魯連。詩云。聞君高節一心雄。奔走求賢西復東。遊學元懷奇偉策。正知蹈海魯連風。右見于幽谷先生丙午集中。

至是。一正隨萬在江戸。正之見而甚驩。謂一正曰。我游歷天下。閲人多矣。未見卓越如足下者。足下自愛。因言足下多病。講學之餘。宜試武藝。劍雖一人敵。而臨陣先衆。不可身無精藝。且以健身體。亦有益於勤學也。正之東西跋涉。

健歩過人。其平生所齎者。重概比甲冑一領。蓋從軍者。當躬擔甲。故用以習身體云。先是鄂虜數往來蝦夷。窺窬邊海。正之深憂之。欲躬自歷視北地窃探虜情。庚戌之夏。遂決意北游。詣玄珠告別。玄珠壯之。置酒餞之。玄珠家藏鎮宅靈神鐸。建武中楠河內所奉獻之物也。紋有玄武神。令正之拜之。正之大喜曰。我將北行。當祖道拜此神。吉孰大焉。盥嗽着禮服拜。至感泣。又謂玄珠曰。我以游歷爲事。今日之行。萬死固所甘也。身後之事。無復關念慮者也。但有一事可託君者。某有息女。欲得天下名士與之。藤田子定。國士無雙。若因君得爲之箕帚妾。死當結草耳。子定者。一正之字也。竟去至水戶訪立原萬。藤田一正。及他有名之士。留數日。一日萬謂人曰。活雲長來。子往見之。正之美鬚髯。故萬戲以此。又有木村謙。居天下野村。正之一見如舊交。肝膽相許。謙詩云。有高山子高山子。東山壯士氣翩々。七尺軀兮三尺劍。一箇行李在半肩。天下山川躋攀盡。偃蹇日吟遠遊篇。行々銕杖驅長蛇。懷中明珠照海天。自言四海皆兄弟。不愁鄉國隔山川。秋風先到白川上。眞人紫氣滿關邊。關尹想像占來往。留得道德玄又玄。風塵俗物誰得讀。寶篆一字直十千。天下野人醜男子。相見談笑夜如年。天厨鷹饌爲君供。玉腋滾々對炊烟。坐間割鮮肉如堵。樽前大杯酒似泉。醉中談孝同奇癖。尋問本朝孝子傳。人世高行誰不美。與君同好亦何然。今日相逢今日別。可惜再遊已多愆。忘老一時意氣豪。鬢上毿々奈二毛。吁高山子高山子。天下要道屬君曹。草鞋如虎開雲霧。知君至德高山仰愈高。

保臣曰。正之公ノ鬚髯美如銀乎。相似關羽乎。可想像。

下野人蒲生秀實、亦素慕正之爲人。聞其北遊。追至陸奥之石卷。不及。適出於　後醍醐天皇之塔婆下。蓋南北之亂。官軍嘗鎭撫陸奥。以故至今爲　天皇供養也。秀實徬徨遲回。遇一樵夫問曰。汝不見偉人乎。對曰。小人前爲一士人所傭。荷水至此。其人即浴水。着禮服。就塔婆下跪拜。出懷中文讀之。每終一字。歔欷不禁。去今既十日。君所問寧此人乎。秀實慮其竟不可及。乃返。正之經南部津輕至松前。竟入蝦夷之境。奔走累日。頗極足力。既而忽有回顧之志。乃自松前航海。風帆如飛。三日三夜。徑達中國。留京數月。

保臣曰。正之公之勤王忠誠。可ㇾ視可ㇾ感。

編者曰。明治三年版志ニノ高山操出ハ。下注余ニ以ニ之ニ閒ニ於ニ此ニ文ヲ載セズ。

保臣曰。傳聞異ㇾ寫。

明年辛亥。辭京遊西海。余聞之下總醫生某。正之遊薩州。關吏拒而不入。正之留數日。作歌曰。薩闘末備突。逸渴尼藥逸渴尼。喝兒喝約乃。切吉目突雜作濃。密翼得叱落儒藥。適鹿兒島老臣。有與正之相識者。爲令關吏許入國中焉。薩人至今傳誦其詞云。而未詳其字。故姑注於此。是歲三月夷舶至於紀伊大島浦。又出沒於筑前。及長門之邊海。幕府下令嚴備焉。壬子夏。鄂虜送我漂民。到于禰牟呂。明年癸丑。幕府遣石川將監村上大學等。按檢事由。正之在西海凡三年。至是遂歸京師。是歲中山大納言愛親卿奉　詔至于江府。其

事秘。世莫知其實也。先是正之在京。嘗過鴨川之湄。有童子捉龜而翫之。甲上有文。尾毛毿々。所謂綠毛龜者也。正之見而奇之。乃與錢若干而得之。謁伏原正二位清原宣條卿呈覽。二位以文學見尊寵。亦以爲祥瑞。即御天覽

叡聖嘉賞焉。蓋獲竊瞻仰

宸極之餘光云。正之以布衣羈旅之士。其志常在於尊皇室攘夷狄。其跋涉天下。而所以激勵人心。鼓動義氣者。未嘗不出於其至誠也。其得靈龜人以爲精誠所感焉。其後久

保臣曰。正之公。尊攘滿腹。其義氣可嘉賞。

之。正之遂不得意于當世。居常怏々不樂。再遊西海。至筑後久留米。主森嘉膳家。居數日。忽若有所病。一日出所齎日乘。寸裂而投之水中。嘉膳驚問其故。且曰。積年盡力。一朝而失之。豈不甚可惜哉。正之曰。我亦非不知愛惜之也。然百事已矣。況此雞肋何足深惜。嘉膳曰。今以足下之所爲。後世或疑爲不良之事。其何以解之。正之即止。嘉膳既退。須臾正之拔刀屠腹。嘉膳驚見。問曰。何爲於此。正之曰。我常欲報國家。其所以爲忠爲義者。今爲不忠不義之事。已矣我智之不及也。是天殺我耳。幸爲我謝天下之人。嘉膳曰。

保臣曰。正之公ノ知非不及。滿腹ノ義氣破憤至於屠腹。其狀量其可推知而已。

追悼
高山正之公
呈
痴詠
新しと人は
いへとも春
はたゝ古き
神世に立か
へるらん
保臣

國有法。願子加治療。正之不聽。嘉膳曰。我館子。子自殺。若不加治。我違法之罪。亦無所逃也。願子亮之。正之許之頃之。正之指東方問曰。帝都及故國此耶。嘉膳爲指示東北。正之拍手再拜。而嚴然端坐。談話如平生。既而醫來視之。吏來檢之。問故。正之曰。狂發而已。問其鄉貫。曰上野新田郡細谷村。於是問者數。不復答。吏乃閱正之所齎之物。無毫可疑者。唯天下名山大水勝區圖畫。及忠臣孝子之行狀。諸名家所送詩文而已。至曉正之竟絕。年四十七。是歲寛政五年也。久留米侯聞而憐之。乃命告新田領主。封

其所貯物件。送還鄉里。廼葬正之於府下遍照院。正之既死。世莫知其所以。後數月。有自死於其墓下者。其人狀貌魁偉。蓋唐崎常陸介也。唐崎亦慷慨之士。正之初聞其名。未識其面。一日詣聖護院法親王。遇一士人。骨相非常。見正之曰。君非高山殿乎。正之曰。君唐崎殿乎。因執手相泣曰。天下之事。何爲至於此極也。卒相與結爲膠漆之交。適聞正之之死。豈亦有所相感歟。明年有人就墳而祭之。即正之之叔父歛持長藏也。正之有子名義助。嘗遊林祭酒之門云。

贊曰。高山正之。天資忠孝人也。其遊歷天下。苟聞有忠臣

孝子。雖遐陬僻壤。必往見之。嘗至水戸。聞若手村有乙吉者。至其家乃着禮服令之坐上坐。執手言曰。浴二百年太平之澤。得與孝行如子者。相見可謂天幸矣。聞江戸有報父讐者。正之自上野馳赴之。爲與孝經一部。垂涕泣而奬諭焉。

保臣曰。正之公忠孝之士。百事以此意行天下事則無不成。又百姓親睦。人貴義理。捨義又何爲。

或謂正之曰。子奚不求仕。正之曰。我未嘗不欲仕也。顧其所以事者何如耳。設使有忠孝文武知有天下。而不知有身。若常陸源義公。及備前烈侯者出。則雖爲之執鞭。亦將自甘也。今跡其行事。一出於孝敬之餘。而其志所存。未嘗不本於春秋之大義也。世徒以逸民獨行而目之。豈眞知正之者哉。

安藝賴襄嘗著其傳。襄以文章名於關西。立傳之意。亦爲不凡矣。然其所傳聞。不能無闕遺。爲可憾也。吾是以叙平昔所聞父師者。使天下後世有所考焉。

天保壬寅（〇十三年）

眞木保臣

保臣贊曰。高山君卓邁不群。有蓋世之才。氣象凜々不可當。夙尊皇室。博要天下之聖君賢士。欲尊大皇室。其精神毫無所私。君有孔明之氣象。時勢不適。竟憤滿之氣。一朝破烈而屠腹矣。嗚呼惜哉。此人而有此死。百事皆屬水泡。亦不痛乎。

保臣謹白

附錄

訓詁

編戸　民間の戸籍に編入せる家、即ち庶人をいふ

膂力　膂はせぼねなり、故に筋骨の力强きをいふ

籍甚　名譽が甚しく廣がること

高門巨室　富貴の家、權力ある大家

諸葛亮　字は孔明、劉備の三顧（三度往訪）に逸ひ出て、仕へ、備の爲に力を盡し、蜀の地を定め、備をして霸業を成さしめたる人

三國　支那後漢の末亂れて魏（ギ）・吳（ショク）・蜀（ショク）の三國鼎立（テイ）せし時代

劉玄德　劉備、字は玄德、諸葛亮の言を用ひ、天下三分の計を定め、遂に帝號を稱す、昭烈帝これなり

帝室之冑　冑は後裔、即ちすぢ

六合　天地四方をいふ

普天率土　天の徧く覆ふ所の下、地の長く續ける所にて、即ち天下中の義

恬然　俗に平氣といふ義

蒙塵　天子は常に道を清掃せしめて啓行せらるゝに、出奔せらるゝ時には其の暇なし、故に變ありて外に遁れらるゝを塵を蒙るといふ

天闕　天子の宮門をいふ

股栗　恐れて足がふるへる

冢側　墓のかたはら

畎畝　畎は田間の溝、畝は田のうねにて、田舍の義

磊落　志大にして細事にかゝはらざること

沒齒　齒は齡なり、沒齒は壽命が終ること

倜儻　才氣がすぐれて、獨立の氣象あること

魯仲連　支那戰國の時の齊の辯士、奇偉にして天下經綸の策あれども仕官せず、好んで高節を持したる人

鄂房　德川時代に露西亞人をそしりたる語

窺窬　すきをうかがふこと

鎭宅靈神鐸　家内安全守護神の鈴（鐸）

玄武神　四神の一にて北方守護の神、龜蛇の形を爲すといふ（四神の左、青龍は東、右白虎は西、前朱雀は南、後玄武は北なり）

祖道　道路の平安を守る神を道祖神といふ、旅立の時に道祖神を祭るより轉じて、旅行に出發することをいふ

盥嗽　手洗ひ口そゝぐこと、嗽はまた漱に作る

結草　死しても思を忘れぬこと

肝膽相許　互に心を示して打明けて隱す所なきをいふ

徬徨遲回　さまよひ歩くこと

歔欷　すゝり泣き、又むせび泣くこと

毳々　毛の長き貌

瞻仰　仰き見てたふとぶこと

宸極　帝王の居所、又は其位をいふ

布衣羇旅之士　布衣は官位なき人、羇旅はたびずまひ、即ち他國より寄寓してゐる士

快々　心滿足せずして、樂まざる貌

日乘　日記のことなり

雞肋　雞のあばらほね、肉少きも捨つるには惜しいとの意

鄕貫　國もとの戸籍、即ち原籍のこと

魁偉　身體が大くて立派なこと

膠漆之交　にかはとうるしとの如く、友情の堅きに喩ふ

林祭酒　祭酒とは古宴會の節、尊長者先づ酒を以て地を祭るといふより、轉じて學政を司る長官の稱とす。德川時代林家は世々大學頭（カミ）と爲る、寛政の比には林述齋大學頭たり

退陬僻壤　かたゐなかのこと

春秋之大義　孔子の筆刪せし物といふ、支那魯國の史書にて、上下の名分を明にし、褒貶の意を寓したる書

執鞭　鞭を執る御者より轉じて、賤役に服して人に事ふる義に用ふ

917
442

製本控

917函	442號	年 月 日
杉山忠亮著作	原木保臣發行	
高山彦九郎正之伝		
		冊
備考		

昭和十七年七月七日印刷
昭和十七年七月廿一日發行　【非賣品】

久留米市兩替町久留米市役所内
編輯兼發行人　高山彦九郎先生慰靈會

久留米市諏訪野町二二六四
代表者　三藤保記

久留米市鍛冶屋町二三
印刷人　秋山昇
（南郷義三）

久留米市鍛冶屋町二三
印刷所　秋松活版所

917
442

終